

本会会員であることのメリットと当部門の活動

九州大学
吉田敬介

この度は、日本機械学会・技術と社会部門の功績賞受賞の栄誉を賜り、大変光栄に思っております。技術と社会部門の会員の皆様に感謝申し上げます。

2001年のちょうど今頃、九州大学の伝熱工学講座助教授であった私に、早稲田大学教授でおられた勝田正文先生から電話があり、「私が技術と社会部門の次期部門長になるので、広報委員会の委員長になってくれないか？」と依頼されました。当部門の部門名をちゃんと言えぬ会員は今でも少なく、私は「えっ、ナニ部門ですか、それ？」と聞いたのですが、勝田先生の口からは「教育関係や技術史や…」という答えが返ってきました。同時に、「広報委員会の仕事はホームページの作成がほとんどで、地方でも十分やれるので、あなたは九州大学の学科ホームページを管理していると聞いたので」とのこと、何とも得体の知れない話でしたが、勝田先生をはじめとする熱工学部門にゆかりの深い歴代部門長の名前を聞いて、人のよい私は首を横に振ることができませんでした。それ以来、「深みに嵌って抜けられない」というのが本音ですが、当部門に関する学術活動や運営活動が「機械技術者になって良かった、機械工学を勉強して良かった」と私に思わせる要因となったことに間違いはありません。

勝田第79期部門長による最初の部門運営委員会が2001年4月に東京で開かれました（部門幹事は現会長の大島まり先生でした）。学生時代から熱工学の研究者の中で育った私にとっては、「私は設計工学が専門で」「私は流体力学が」「私は〇〇…」という委員の自己紹介が新鮮でした。が、同時に、私はハッとしました。かつて、本学のある先生が、修士課程の学生に対し「君の専門は伝熱学でも燃焼学でもないだろうが、機械工学だろうが!? もっと言えば、工学だろうが、機械技術者の卵だろうが!? 何を狭いこと言っているんだ!」と、叱咤していたことを思い出したからでした。そう、日本機械学会は「学会」ではないんだ、英語名称「Society of Mechanical Engineers」にあるように「機械技術者団体」なんだ、と改めて気づきました。

我々は、大学の研究者とはいえ工学部の研究者であり、理学部の研究者ではありません。常に「機械」という社会に対する出口があります。機械という人工物をつくるための学問が機械工学で、学問も、それを理解するための研究も、常に手段です。研究は最終目的ではありません（もちろん、機械技術者育成のための教育も手段です）。だからこそ、「理学の研究が上か、工学の研究が上か？」という議論は全く幼稚で、口にするのも恥ずかしい、と、研究者ならみんな分かっているはずですが、現実には甚だ疑問が残ります。テレビ番組の「どっちの料理ショー」は娯楽番組ですが、「ラーメンが良い料理か、パスタが良い料理か?」「ラーメンは庶民的であるが、国内だけで、世界に通用するのはパスタだ」を真剣に考えている、「機械工学科所属の研究者はノーベル賞を取ってない」ということから、研究者が世界的な「何とか賞」を受賞することを真剣に考えている、と感じているのは私だけでしょうか。その是非はともかく、本会が目標とする活動内容は少し違うように思っています。

機械技術者の活動はそのような話と異なり、学校を卒業して良い「もの」を作って社会に出して評価を問う、評価は金儲けでも良い、企業や開発者個人の名声でも良い、あるいは国の安全保障や国民の福利厚生への貢献でも良い、それを実現することが最終的な目標です。そのための技術者の活動を支援あるいは互助するのが、本会の役割です。本会会員の活躍を見て、「自分も機械技術者になりたい」と思う人を増やすことも、本会の役割です。私が当部門の活動に加わって以来、本会を取り巻く環境は益々厳しくなっていますが、学術団体の「じり貧」は何も本会に限ったことではありません。反対に、「機械の学術団体」である本会の活動はますます重要になっています。要は本会の役割を見失わないことです。大学等の「学

会員と企業等の「産」会員とでは、本会会員であるメリットは大きく異なります。さらに「学」も「産」も、所属する組織や会員の職種で異なります。当部門は、いわゆる「大きな大学」でない大学や高専、工業高校等に所属する会員(学生員を含む)や、中小企業の会員、機械工学に関連する社会活動を行っている会員(例えば博物館の学芸員や産業史研究者など)が、会員であることのメリットを大いに享受できるような活動を忘れずに活動しています。

当部門の活動者はまだ少なく、年1回の部門講演会と2年に1回の国際会議を開催するのが精一杯です。支部の講演会に至っては、支部の世話人に「こんな変な部門あるの? こんな活動分野あるの?」と困惑されるありさまです。とはいえ、最近では「工学教育・技術教育」や「産学連携・社会連携」に関する発表が、機械工学の伝統的な四つの専門分野を標榜する部門等のセッション中に現れています。また、大久保英敏 第85期部門長が玉川大学で始めた「新☆エネルギーコンテスト」は、今では福島県郡山市の日本大学工学部で開催される定期的行事になっており、東北支部にも協力してもらうようになっています。さらに年1回の部門講演会も東京以外の地方で9回(東北2, 関東1, 東海1, 信越北陸2, 中国四国1, 九州2)行われ、地方開催が定着しつつあります。大都市では当たり前で、ほとんど目立たない学術的イベントも、地方の小さい大学や高専等で開催すれば、機械工学、否、機械に対する理解はより深まっていく、との考えから続けて頂いています。その他に、200回以上を数えるイブニングセミナーも、工学倫理セミナーも、機械遺産の認定事業も…、は部門の活動報告書でないので止めますが、技術と社会部門のプレゼンス、特に学会外に対するプレゼンスを高めておけば、本会はまだまだ発展すると信じています。さらに、敢えて誤解を恐れずに言えば、「あいつは大したことないのに、本会で目立っている。それなら、オレも技術と社会部門でやってみよう。オレの方が業績がある」という人々が当部門に入って来て、「軒先貸して母屋を取られる」状態になれば、存外の喜びです。当部門は、機械をキーワードにしているからこそ作りやすい部門で、他の学術団体では「技術と社会」のような活動分野はほとんどありません。当部門の益々の発展を願ってやみません。

日本機械学会技術と社会部門ニュースレター: <http://www.jsme.or.jp/tsd/news/index.html>

日本機械学会

技術と社会部門ニュースレターNo.37

(C)著作権:2018 一般社団法人日本機械学会 技術と社会部門